
悪魔の相談

葦沢 亀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

悪魔の相談

【Nコード】

N9138I

【作者名】

葦沢 亀

【あらすじ】

悪魔は尋ねる。

「いなければいいと思うやつは誰だ」

悪魔は、指名された人間の命を食べる。

しかし、悪魔はそんなことはしたくなかった。

そんな悪魔が出会った、ある男の話。

私の友人に悪魔がいる。ただし、誤解しないでほしい。彼は本当に善い奴だ。とは言うものの、彼は本当に「悪魔」の仕事をしている。彼は、一日一人人間を選び、その前に姿を現し、こう尋ねる。

「いなければいいと思う人間は誰だ」

そして、彼は指名された人間の命を食べる。

しかし彼はこんな仕事はしたくない。彼は神によって造られ、神の命令でこういうことをさせられている。彼は言っていた。いつもいつも善良そうな人間を選んでいく。「いなければいいだなんて、そんな人はいないよ」と言ってくれそう。

だが彼の質問は、神の力によって人間が嘘をつけないようになっていく。だからほとんどの場合彼の期待は裏切られてしまう。そりゃ、そうだ、憎しみを持たない人間なんていない、と私はいつも言う。すると、彼はいつも決まって、ただ一言「いません」と言われれば、また一つ罪悪感を背負わなくて済むのだけだね、と言う。

だから彼は時々私のところに来る。そして、胸にたまったものを吐き出し、いつもすまない、と言って帰る。世間では悪魔と言えは悪い印象しかないが、私はこの様な悪魔にしか会ったことはない。

しとしとと雨が降った日にまた彼が来た。彼の顔はマネキンのような無表情になっていた。彼が限界に近付いている証である。私が、いつものように紅茶を出すと、彼も、いつものように語り出した。

ある新月の夜のこと。ある人間がこう言った。

「この世で最大の悪がいなけりやいいと思う。そいつの命を食ってくれ」

「それは俺のことか」

つい口から出てしまった。

「あんたじゃあねえよ。あんたは自身が悪だと気付いているじゃねえか。あんたは悪であっても、そんなに悪じゃねえ。最大の悪は、自身が悪だと気付かず、自身を正義だと信じ込んでいる奴だな。大抵善いことをやっている奴がこれだ」

「とするとおまえは善いことをしている人間を殺せというのか」

「いや、違えよ。光があるから陰ができるんじゃないか。悪を生むのは善なんだよ」

「しかし、善がなくなったらこの世は悪だらけになってしまふ。悪を正すべき存在が善だ。善が悪を生むならば、悪を善に変えることができるのが善だ」

「分かってねえなあ。よく考えれば分かることだろう？光が無けれ

「ば陰はできねえんだよ」

「それはつまりこの世全てが悪になるということだろう。それはおかしい。光が無ければ真つ暗だ。未来は無い」

「いいか？全てが悪なら、その中に於いて悪というものは存在しなくなる、つてのは理解できてるよなあ。例えばよお、現に人間は尊い命を、食事のためだけに自然の摂理を無視して造り出し、檻の中に閉じ込めて見世物にし、あるいは食い、自己中心的な癒しのために飼ってるが、そうでなけりゃあ、ハエたたきで潰し、ひき逃げしても放っておき、生きている命さえガス室へ放り込んでいるじゃねえか。この地球の生態系はな、ヒトから人間に進化するまでは食うか食われるかだけだったんだ。それなのに、人間はこの地球を要るかなえかねえかっていう目で見てるんだぜ。それまで非現実だったものを現実にしちまった人間は、まさに地球にとって最大の悪だな。そうだ。最大の悪は人間だ。まさしく人間は自分たちがさも正義の味方のように振舞っているじゃあねえか。さあ、早えとこ人間をこの世から全て消し去ってくれ」

「しかし…不可能を可能にする能力は悪ではないだろう。むしろ善だ。医学というものは何億何兆という生命を救ってきたんじゃないのか」

「本当にあなたは分かっているねえなあ、感心するぜえ。医学が今のよう発展するまでにはな、まだ地球が人類を護ってくれていたんだ。病気にかかりやすい人間、能力の劣る人間は淘汰されて人間はこれまで進化してきたんだよ。それが今じゃあ病気になった人間を治し、劣った人間までも『人権』という言葉で生き残らせちゃまっているじゃあねえか。つまりさあ、負の遺伝子が残されるわけだよ。その結果今まさに人間は退化し始めているだろお。地球からの罰だ

よ、こりゃあ。人間は罪を犯したんだ。地球から与えられた遺伝子という仕組みで、間違いなく人間はこれから暗い未来を進むぜ、地獄を見た方がいくらいのさあ。そうだなあ、さっきの話は無しにしてくれえ。人間を今ここで殺しても罰には足らねえや。この辛い道をこのまま歩ませようじゃねえか。それが最大の悪に対する最大の罰だろお？」

悪魔は呆氣にとられてしまった。人間が、人間を否定し、消し去ろうとして、人間の未来に存在する暗黒を見出すと、そこへ向かわせようとする。悪魔は聞かずにはいらなかった。

「どうしてお前は人間をそんなに憎むのか」

その人間は嘲笑を浮かべてこう言った。

「人間さえいなければあ、俺は人間に生まれ、人間に苦しめられることは無かったからだよあ。ヒトだったら良かったんだけどよあ」この人間の眼だけを見れば、この生物が人間だと証明できる要素はどこにも無かった。

「今から楽しみじゃねえか。俺は見れないだろうから、あんたが見ておいてくれよあ」

この人間はこう言い捨てると、のそのそと去って行った。

しばらく立ち尽くしていた悪魔はふと気付いた。仕事はどうしようか。あの人間は、撤回はしていたが、確かに人間がいなければいいと言った。自分の仕事は、対象となる人間の、いなければいいと思う人間の命を食うことだ。つまりここでは、全ての人間の命を食うことだ。だが彼にはできなかった。全ての人間の命をいっぺんに食うことなんて容易いことだ。たった60億の命である。

それでも彼にはできなかった。

彼は結局あの人間の命を食ったという。あの人間は最大の悪がいなければいいと言った。だから彼はあの人間の命を食った。そう言った。

私が、それで正しかったと思う、という感じのことを言うと、「そうか、いつもすまない」とだけ答え、残りの紅茶を一気に飲み干すと、またいつものように帰って行った。

空の色は相変わらずだったが、しとしと雨はもうやんでいた。

（後書き）

どうも、作者の亀です。読んでみていかがだったでしょうか。この「悪魔の相談」は、思いがけずできた作品です。メッセージが強めに表れているのではないかと、勝手に思っています。

実は、この作品中で男が言う次のセリフ、

「…医学が今のように発展するまでにはな、まだ地球が人類を護ってくれていたんだ。病気にかかりやすい人間、能力の劣る人間は淘汰されて人間はこれまで進化してきたんだよ。それが今じゃあ病気になった人間を治し、劣った人間までも『人権』という言葉で生き残らせちまっているじゃあねえか。つまりさあ、負の遺伝子が残されるわけだよ。その結果今まさに人間は退化し始めているだろ。地球からの罰だよ、こりゃあ。人間は罪を犯したんだ。…」

これなんです、どっかの某市長さんがブログで書いて問題になっているのに似てるんですね。もちろん、こっちの方が先ですよ。かなり前から書いてあった小説ですし。

偶然、なのでしょうか。とにかく差別はいけないことです。

もしかしたら、続編なんてのもあるかもです。その時もまた読んでいただけると嬉しいです。それでは。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9138i/>

悪魔の相談

2010年10月15日19時07分発行